

## はじめに

大阪府の北部から南部へ連なる上町断層帯。その中心部に、大阪都心部・上町台地境界は位置している。この断層が動けば、大阪都市圏で国内最大級の被害が発生すると予測されている。そんな断層をすぐそばに抱えているものの、上町台地境界ではこの数十年間というものの大きな災害を直接経験していない。歴史・文化の集積地として、都心にありながら公園・緑地に恵まれ、

の意識と行動を誘発することを重要テーマと考えてきた。当連載第16話・17話では、それらのプログラム展開と、地域への波及状況を簡単に追ってきた。

そこから見えてきたのは、減災のための取り組みというものが、非日常の特別な営みというのではなく、むしろ地域での日常を大切に豊かに生きることそのものであること、暮らしのなかにある身近な存在に関心を寄せ、身近な資源を活かす営みを通して、人と人のつながりを再構築していくこと。最も大切なことは、生活文化としての減災文化を築くことではないかというヴィジョンである。

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

大阪・上町台地発  
都心居住文化の創造へ  
(第18話)

つながりの回路の原点、  
子どもとまち、  
子どもと大人の接点を豊かに

学校や病院も数多く、常日ごろ住みやすさが強調されている反面、災害リスクへの感度が高いとはいえない状況がある。

地域コミュニティに目を向けてみると、少子・高齢化や世帯の小規模化、新たなマンション居住者の急増などを背景に、かつて地域が担ってきた安心・安全を支える力が及ばない対象や見守りの隙間が増大しつつある。こうした現実をふまえ、筆者は、「U・C・O・R・Oプロジェクト」(※1)を介した小さな試みとして、地域に潜在する大きな課題のひとつ、災害リスクに向き合うため「減災」へ

裏返して見れば、災害リスクへの想像力の乏しさは、災害に限らず、他者の存在や環境や暮らし全般への想像力の乏しさにつながるものだとはいえる。そのような状況にこそ、大きなリスクが宿っているといえ、上町台地境界の特性を活かしながら想像力を引き出していく取り組みの必要性が立ち現われてくる。そこに、地域資源を活かしながら人々の交流を促し、新たなつながりを紡いでいく社会実験としてのU・C・O・R・Oプロジェクトの役割と、まちの暮らしを持続的に支えていくための、ソーシャル・キャピタルのありようを展望したい。

ソーシャル・キャピタルの再構築には、つながりのデザインの回路が欠かせない。とりわけ重要な基盤となっていくのが「自己と風土のつながり」の回路と「自己と他者のつながり」の回路といってもいいだろう。そこで、今回、連載第18話では、自己と風土のつながり、自己と他者のつながりの原点となる、子どもとまちの関係性に着目をしてみることにする。

## 「上町台地子どもと遊びいま・むかし」に見る、遊び場の変遷

U-CoRoプロジェクトでは、第2回目のウィンドウ・エキジビション(2007年5月14日〜8月31日)で、「上町台地 子どもと遊びいま・むかし」(※2)をテーマとし、子どもたちの遊びと遊び場の変遷を追いながら、まちと暮らしの移り変わりと、子どもたちを育み続ける上町台地の姿を見つめた。子どもたちを育んできた、上町台地の自然や生活文化、まちの資源を再評価し、次世代に引き継いでいく、ささやかなきっかけになればとの願いを込めて企画したものである。主な展示のひとつとして、上町台地で子ども時代を過ごした祖父母世代(昭和前期頃)、父母世代(昭和後期頃)、そして平成の子どもたち、それぞれの世代のお気に入りの遊びと遊び場について30名弱の住民の方々への聞き取りを行いマップ上にプロットした。

地域全体を網羅したのではなく、30名弱の限られた方々への聞き取りではあるが、世代間に見られる差異から、時代背景や生活環境の変遷とともに、上町台地境界の子どもたちを取り巻く環境の移り変わりや、それでもなお受け継がれている地域の資源力が垣間見えてくる。その特徴の一部を簡単に紹介しておく(図1)。

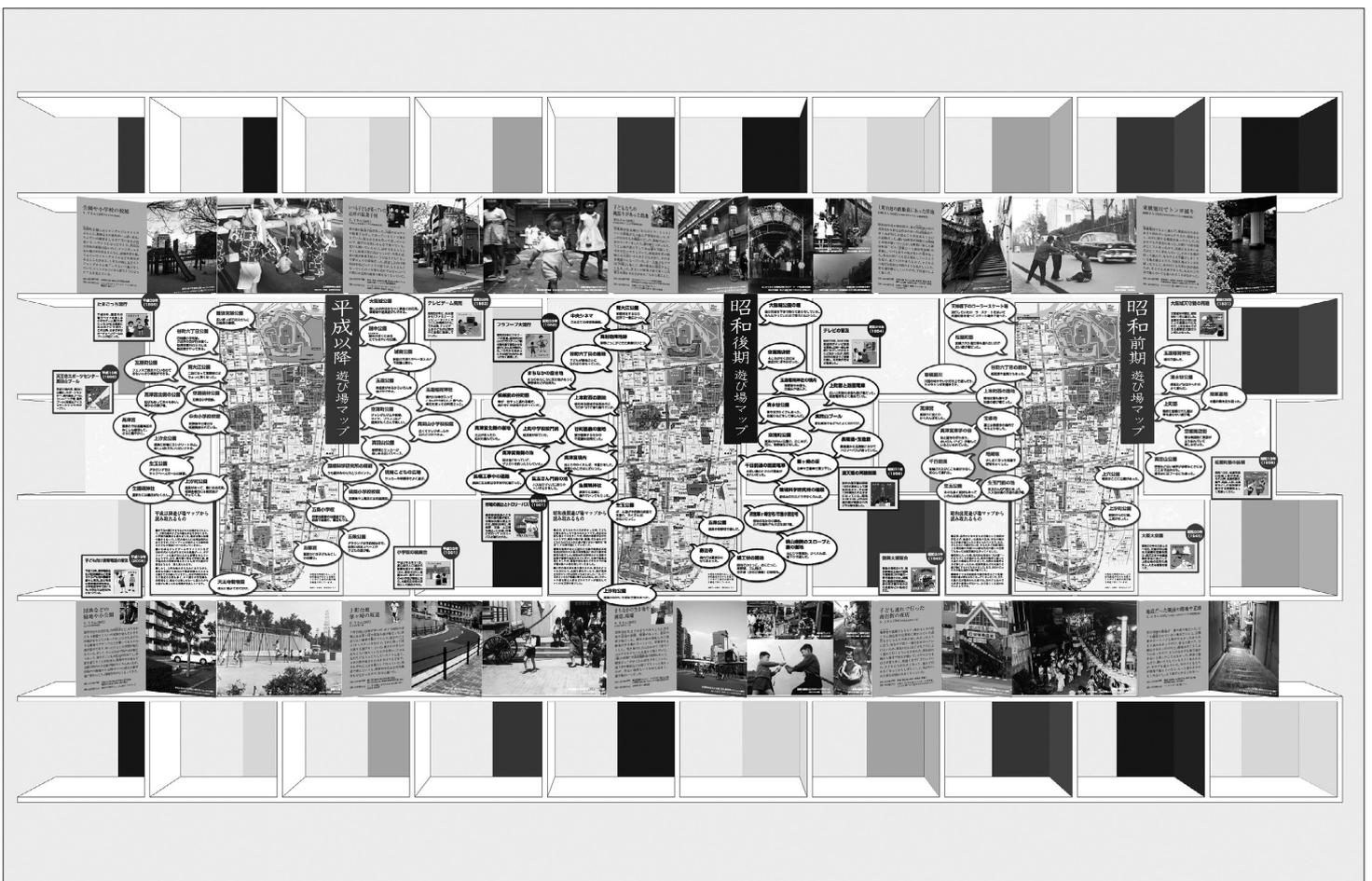


図1 U-CoRoウィンドウ・エキジビション02「上町台地 子どもと遊びいま・むかし」展示から「3世代の遊び場マップ」

■昭和前期の遊び場マップから読み取れるもの

地道だった路地や往来、社寺の境内、あるいは川や堀川などが主な遊び場だった。まちのすぐ外側には田園風景も広がっていた。

昭和に入ると近代的な街並みづくりの一環として大通りの整備も進められた。まだ自動車も少なかったため、松屋町筋などの大通りを遊び場にする子どもも多かった。

戦時下では学徒動員や勤労奉仕などで児童・生徒は遊ぶ間もなく、父親や兄が徴兵された家では、男の子も女の子も家事や家業の手伝いに追われた。

■昭和後期の遊び場マップから読み取れるもの

戦災の焼け跡、廃墟、空き地など、子どもたちは与えられた遊び場ではない場所を見つけ出して遊び場にしていった。上町台地特有の坂を滑り下りる遊びなど、自分たちで遊びを發明し遊び道具を作る時代でもあった。

しかし、大阪万国博覧会の頃を境に、まちの環境や遊び道具のありようも大きく変化していく。昭和40年以降増大する道路の拡幅や建物の高度化などに伴って、公園や緑地は増えていくが、路地や空き地などそれまでの遊び場は徐々に姿を消していく。

■平成以降の遊び場マップから読み取れるもの

平成の子どもたちがあげた主な遊び場は、ほとんどが公園と学校(校庭)、そしていくつかの神社(境内)である。

映像ゲーム、デジタルゲームの浸透も遊び方に大きな影響を与えているようである。また、塾や習い事など、学校と家、遊び場以外の時間が増えたことも外での遊びのありように変化を与えている一因と見られる。

一方で、身近な街区公園から真田山公園や難波宮跡、大阪城公園、天王寺公園などの大規模な公園、

数々の社寺の境内などに恵まれ、セミ捕りや草花摘み、草野球といった、都心部では楽しめないと思われがちな遊びも楽しめる環境が残されている。

路地や坂道、鎮守の森などの緑やがけ地の多い上町台地境界は、子どもたちにとって格好の遊びの舞台でもあった。高度経済成長期以前には、子どもたちは自ら遊び場を発見し、身近な材料で競い合って手作りの遊び道具を作り、まちの空間を存分に楽しむ遊び方を次々に發明していた。遊びを介したまちや人や自然との深く広い交わりのなかで、子どもたちの想像力・創造力が、のびのびと豊かに育まれてきた様子が伝わってくる。

しかし、現在、まちを舞台にした子どもたちの遊びや学びの経験は、非常に狭く浅くなりつつある、そんな実態が伝わってくる。と同時に、こうした流れに抗して、上町台地境界の資源の力を活かし、上町台地境界ならではの文化や地域とつながる暮らし方を伝えていくこうとする取り組みがあちこちに見られる。こうした実践に着目したのが、U・CoRoプロジェクト第10回目のウィンドウ・エキジビション「まちで育む上町台地の子」(※3)(2010年2月1日～5月28日)である。

「まちで育む上町台地の子」  
展示の狙いと構成

「まちで育む上町台地の子」は、上町台地境界で大人たちと子どもたちがともにつくる風景、伝えていくところ、積み重ねられてきた営みの来し方そして現在をたずね、その先に未来を見つめる展示である(写真1)。



写真1 U・CoRoウィンドウ・エキジビション10 「まちで育む上町台地の子」展示風景(左)と案内はがき



第二次世界大戦が終わって今年(2010年)で65年になる。展示では、まず戦後の上町台境界の子どもたちを取り巻く社会の潮流を、図表と世相史で振り返るコーナーを設けている。上町台境界の4区(中央区・天王寺区・生野区・東成区)の人口構成の推移、小学校の学級数や児童数の推移とともに、国内外や大阪での時代を象徴する出来事、子どもたちをめぐる世相トピックス、そして大阪・上町台境界での都心居住をめぐる出来事や子どもたちに関わる出来事などをまとめて紹介している(図2〜4)。

続いて、上町台境界を舞台に、かつての子どもたちにとって、忘れえぬまちの大人たちとの思い出のエピソードにスポットを当てている。たとえば、子どもたちにとってオアシスのような存在だった交番とお巡りさん、一緒に相撲をとったり喧嘩の仲裁もしてくれた自転車屋のおっちゃん。銭湯の番台さんと子どもたちとの丁々発止のやりとり、夜警仲間とお酒を飲む父を迎えに行く子ども、近所の家族に混じって囲む食卓など。日常のなかにあった、大人と子どもの豊かな接点のありようを描きだしている。

そしてメイン展示として、現在、上町台境界の社寺、PTA、町会や商店街、能楽堂や博物館、国際交流施設等々で力を注がれている、大人と子どもがともにつくる遊びや学びの多彩な取り組みの数々を、担い手の方々の思いのこもったコメントを通して伝えている。

## 大人から子どもへ、 伝え育む上町台地のヒストリ

上記のメイン展示として紹介している、特徴的な取り組みをごく簡単に紹介しておこう(※4)。人と人、まちと人の関わりが希薄になっていく社会のなかで、いわば昔

子どもだった大人たちから将来大人になる子どもたちへ、上町台地のこころを伝える脈動である。新しいマンションにやってくる暮らす子どもたちにとっても、代々上町台境界に暮らす子どもたちにとっても、このまちでの思い出がかけがえのない人生の礎になるように、そんな願いが込められているようだ(写真2)。

### ■ 悠久の上町台地で考古学者になってみよう「歴史博・わくわく子ども教室」

昔の瓦の拓本体験など、考古学の専門性に根ざしながら、誰でも気軽に楽しめるプログラム、「子どもの頃の夢中でわくわくする体験はとて大切」寺井誠さん、大阪歴史博物館)。

■ 能から楽しく学び伝える有形・無形の文化力「能と遊ぼう！」

能の謡や舞を覚えるだけでなく、アートとのコラボレーションで楽しい実験的な試みを導入し、子どもたちの創造力を引き出す、「小道具の工作もあり、遊びながら能に親しむ機会です」(山本章弘さん、山本能楽堂)。

■ いくつか思い出す「気づき」のための1泊2日「高津宮夏休み宿泊体験」

夏休み、小学校1年生から6年生まで年の差のある子どもたちが、ボランティア・スタッフの大人たちと境内で宿泊体験。銭湯体験など普段

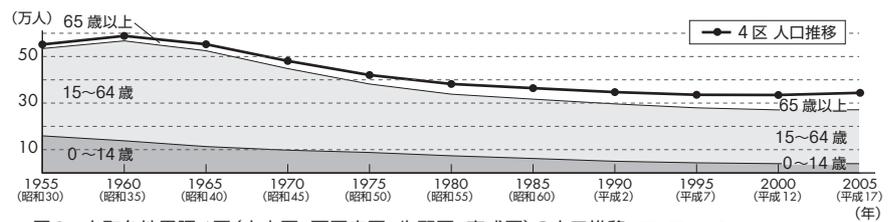


図2 上町台境界4区(中央区・天王寺区・生野区・東成区)の人口推移(国勢調査から)

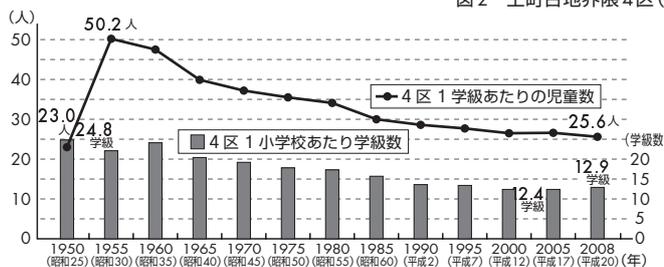


図4 上町台境界4区(中央区・天王寺区・生野区・東成区)の小学校あたり学級数・学級あたり児童数推移(大阪市統計書から)

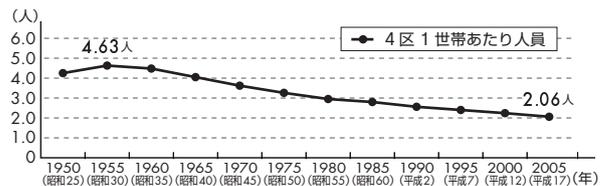


図3 上町台境界4区(中央区・天王寺区・生野区・東成区)の1世帯あたり人員推移(国勢調査から)

縁遠くなった町の暮らしも経験、「共同生活から、何かしら、気づきをを得てもらえれば」(小谷真功さん、高津宮)。

■子どもへ伝える町衆の伝統と心意気

【東地区子供太鼓中】

生國魂神社の旧東区内氏地にあたる中大江・南大江両小学校区の子ども有志が参加、大人たちの勇壮な枕太鼓の稽古を見ながら、子供太鼓を覚える、「いくたま夏祭(7月11日・12日)で、太鼓と祭りに親しみ、祭りや礼節を学ぶ」(田中俊彦さん、生國魂・太鼓中)。

■絵本で出会う子どもと異文化

【アイハウス外国語絵本読み聞かせ『アイアイ』】

絵本を通じて英語や中国語、韓国語などに出会ってもらい、外国の文化に楽しくふれてもらう、「出会いを通じ異文化への理解を深めてほしい」(康南姫さん・伊藤美恵子さん・北中公子さん、(財)大阪国際交流センター 読み聞かせボランティア)。

■人形劇を通じて寺町と出会う子どもたち

【なにわ人形芝居フェスティバル】

毎年4月の第1日曜日、一心寺をはじめ下寺町にずらりと並ぶお寺を舞台に、数々の人形芝居が繰り広げられる、「お寺がもう一度地域とつながっていくために」(高口恭行さん、一心寺・なにわ人形芝居フェスティバル実行委員会)。

■子どもの健やかな成長を願う地域の心の継承

【将軍地蔵尊子供盆踊り】

毎夏8月23日・24日には小学校の校庭に盆踊りのやぐらが生まれ、地元10町会、100名余の住民の手による企画・運営でたくさんのお家の屋根が並ぶ、「地域の未来の担い手たちに楽しい思い出を」(神田晃治さん、将軍地蔵尊保存会)。

■まちを楽しく変えていく

【大阪市立大池中学校PTAおやしバンド】

生野区発・多文化共生のメッセージを発信。日本人と在日コリアンのPTA現・元役員と教員で結成されているバンド、「頑張る子どもを見て、俺たちおやしも仲良く応援」(古川正博さん、大阪市立大池中学校PTAおやしバンド)。

■伝統行事の復活で子どもとまちをつなげる

【方除地蔵子ども祭り】

毎年8月23日夕に東上公園で開催。地域の方々の手弁当のイベントで楽しい屋台が並び、だれでも参加できるお祭り、古くからのコミュニティと再開地区の新しい住民が暮らすまち、「子どもの笑顔から地域のつながりをもう一度」(服部多嘉男さん、東筆振興町会)。

■共生社会の未来の担い手を育て

【生野コリアタウン人權研修プログラム】

在日コリアンの暮らしに触れながら、多民族共生や韓日の歴史などについて学ぶことが基本の体験学習とフィールドワーク。毎年8、9千人の子どもや大人が学ぶ、「在日コリアン文化に触れ、まず自分で考えるところから」(郭辰雄さん、(特活)コリアNGOセンター)。

いずれも、上町台地界隈に積み重ねられてきた歴史・文化特性に根ざした取り組みである。各主体の属性や活動の背景こそ異なるが、共通しているのは、地域資源の価値を現代的に再評価し、人と人、人とまちのつながりを持続的に再構築していくこととする意志の所在である。



写真2 U-CoRoウィンドウ・エキジビション10「まちで育む上町台地の子」で紹介している取り組みの数々(展示リーフレット『U-CoRo独案内10』から)

## 第18話のおわりに

第18話を展開するにあたって、第16話・17話で取り上げた、災害リスクへの想像力を鍛えていく必要性を入り口とし、災害リスクへの想像力の乏しさが、災害に限らず、他者の存在や環境や暮らし全般への想像力の乏しさにつながっていく問題であること、それこそが大きなリスクであるという視点に立った。その際に注目したのが、自己と風土のつながり、自己と他者のつながりの原点ともいえる、子どもとまちの関係性のありようである。

大きな社会潮流として、子どもたちとまち、子どもたちと大人たちの接点は、今、驚くほど縮小してきている状況が見てとれる。子どもが接する大人の種類や数が極めて少なくなり、遊ぶ場所も受身的で限定的になってきている。こうした状況のなかで、将来に渡って持続的にソーシャル・キャピタルを再構築していくことは容易ではないだろう。つながりのデザインの基盤となる、自己と風土のつながりや、自己と他者のつながりを得るには、日常の暮らしやまちづくりの中に、時代や世代を貫いて共有され更新されていく文化的な営みが求められていることを痛感せざるを得ない。

前項で紹介した、取り組みの数々は、いずれもそうした社会的課題に対して、意識・無意識にかかわらず、地域の側からアクションを起こしている例と捉えてよいのではないだろうか。こうした営みに触れながら、過去に思いを馳せ、時空のつながりを感じとり、自己の存在を肯定し、他者を尊重する心を持ち、未来を切り開くまなざしを持った子どもたちが育っていくことを願わずにいられない。

(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員)

CEL

(※1) NEX T21第3フェーズ居住実験の一環としての地域コミュニケーションデザイン実験(U-CORoプロジェクト)の概要等は、季刊誌CEL 83号・84号・86号・88号・89号・91号大阪・上町台地発 都心居住文化の創造へ(第12話・17話)及びU-CORoホームページで紹介している。  
<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/>

(※2) 主催：大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)、企画：U-CORoプロジェクト・ワーキング、協力：青山富男さん・岡田孝輔さん・白石さん・服部多嘉男さん・松本和子さん・森茂樹さん・山田浩史さん・吉田光子さんほか「遊びと遊び場聞き取り調査」に協力いただきました上町台地の住民のみなさま、上町台地からまちを考える会、越中屋「夕陽丘ストーリー」、大阪市、大阪市天王寺動物園、大阪府立中之島図書館、太田順一さん、からほり倶楽部、からほりまちアート実行委員会、杉浦貞さん、玉造稲荷神社、西代官山クラブ、(有)富士原文信堂、そのほかのみなさま(順不同)

(※3) 主催：大阪ガスエネルギー・文化研究所(CEL)、企画：U-CORoプロジェクト・ワーキング、協力：秋田光彦さん、生國魂神社、生國魂・太鼓中、一心寺、上坂正治さん、上町台地からまちを考える会、大阪市立大池中学校PTAおやじバンド、(財)大阪国際交流センター、大阪歴史博物館、岡田孝輔さん、小川治海さん、岸本智嘉子さん、金恵美さん、高津宮、(特活)コリアNGOセンター、将軍地蔵尊保存会、鈴木一男さん、東筆振興町会、中越慈子さん、中西美穂さん、(有)富士原文信堂、三島啓子さん、山本能楽堂、山本良一さん、吉見孝信さん、吉村健一さん、そのほかのみなさま(50音順)

(※4) 個々の活動情報や、コメントの詳細はNEX T21/U-CORo ウィンドウで2010年2月1日～5月28日までパネル展示している。会場へのアクセスは、U-CORo ホームページ <http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/issue/cel/> に掲載。展示終了後には、同ホームページで展示内容をアーカイブとして公開する。